

随想 三題 男性諸氏ノ御意見求む

上村くにこ

△甲南大学文学部助教授▽



『性の崩壊』という本を最近出させてもらった。私の初めてのエッセーということもあって、ヤセル思いで書いたのだが、幸い女性たちからはさっそく熱い反応があって、とてもうれしく思っている。けれど体重はまだもとどおりにはもどらない。というのはこの本は過激な見かけによらず、実は男性たちへの求愛の書なのだが、当然というか案の条というか、男性たちからは今のところイエスともノーとも反応がなくて、やっぱりふられたかと少しさびしい気持ちもあるからである。

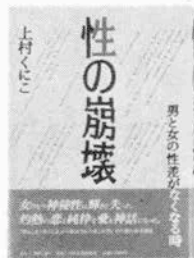
この本は、これから幾世代かにわたって男性には未曾有の困難が待ちうけているけれど、女性も男性もおなじ気持ちになって、手にとって受難時代を乗りこえましょうという呼びかけなのである。戦後男女平等は急速に進んで七対三ぐらいの平等が実現された。今までのところ男性は頭では平等を認めながら、実生活では男の権利をガッチリ守るという二重生活をするのが容認されてきた。とこ

ろが女性たちはぐんぐん要求を拡大させて、五対五の完全な平等がほしいと主張しはじめたのだ。私は保証するが、女性の要求は強まりこそすれ、弱まることは絶対にならない。口では男と女は平等であるべきだと言ってきたのだから、今さらやっぱり女は男の補佐役をしてほしいなどと本音を言えば「女性差別！」という葵の御紋できめつけられる。よその女性がキャリアアウーマンでキラキラ光っている

のをウォッチングするのは楽しいが、自分があるために家で女の役を押しつけられるのは男の価値が下がるような気がして、とてもがまんできないという複雑な感情がうずまいている。男女平等の最先進国スウェーデンではついに男がかけ込む「男の家」がつくられたという。男の立つ瀬はどんどん沈んでいるのである。私が提案したいのは、溺れるまえにまやかしの「男らしさ」という呪縛を解き放つて、すでに「女らしさ」の足かせを男性より先に脱ぎかけた女性たちと一緒に、新しいライフスタイルを作りませんかというラブコールなのである。そのための基本的姿勢をいろいろと書きつらねてみた。男性たちがこの本に本音で論議をふきかけて下さるのを熱い思いで待ち望んでいる。



カナダの友人宅にて（8月・88年）



日本実業出版社刊 1600円

ピラニアのサシミは

美味かった

村田 妙子

（神戸女性合唱連合団員）



移民80周年を祝う祝賀祭に神戸女性合唱連合の一員として参加、サンパウロ、リオを訪れたのは六月中旬、公式行事に出た後リオ、イグアス、アマゾンをおブションとして観光、その後半月は友人とたった二人ブラジル、アルゼンチンそしてウルグアイを見、聞き、歩き、やっと一カ月振りに真夏の日本に帰って来たのは七月の半ばでした。

ブラジルは世界有数の広大な風土に、文明と未開が共存する国、そして様々な苦難を抱えて経済改革と政治、社会改革との戦いに立ち向う中で、私がこの国に感じたのは、アルゼンチン等比べて、陽気で国全体が活気にあふれていた事です。多様な人種、そして貧しい人も富んだ人も豊かな自然の宝に恵まれ各々の生活^{ライフ}を明るく人間らしく生きている様に見え、日本での我々の生活をかえり見て何か不思議と感動をおぼえました。さてまず訪れたのは南米の真珠と呼ばれるコパカバーナ海岸、そして人跡未踏の神秘をたたえるアマゾ

ン、たった二泊三日の旅でしたが雨期のアマゾンクルーズを充分に楽しんできました。私達は大変天候に恵まれイグアスの滝をおとずれた時も前日の大雨で近年まれに見る水量で実に壮大な眺めでしたし、アマゾンクルーズも雨期なのにその日は全くの晴天で、満々と水をたたえるジャングルの中を小船で行き、あちこち飛びかう珍しい熱帯の鳥をカメラで追い、水に足をつけた高床の家でのんびり手



ピラニアを釣り上げてびっくりノ

を振る人々、そしてのんびり湿地で昼寝をしている水牛や犬の姿、小船で行きかう小供達の姿を楽しんで来ました。ピラニアを棒の先につけた肉でつり、それを船上でサシミとフライにして食べました。何とも美味しいサシミでした。又夜には、ワニ狩りにも出かけました。12時頃から小船で川のしげみに出かけ懐中電灯でワニの目の光るのを追い、そこへ舟で行き原地の人が手づかみするのです。もともつかまるのは小ワニですぐに離してやるのですが、お腹をなせてやるというまでもじっとして本当に可愛らしい姿でした。とにかくアマゾン河は広くまるで湖か海の様で、あの雄大な流れは今でも私の脳裡にやきついていきます。マナウスのトロピカルホテルでは夜、南十字星を見ながら泳いだ事もこの旅行中の忘れがたい事の一つでした。その後、リオに戻り、そこからアルゼンチン、ウルグアイの旅に出かけたのですが、これは又ブラジル特にアマゾンのそれとは全く異なる味の旅でした。

随想 三題 港の音

武下 優

〈元神戸港湾福利厚生協会
四十年史編纂委員長〉



私は二十六年間、生田区中山手通二丁目に住んでいた。ここへ移ってきた昭和二十三年には、附近はまだ戦災から復旧されておらず

前も後も広々とした空地であった。通りの向い側は山本通二丁目で、何でもこのあたり一帯は世界的な富豪の所有地と噂され、これを裏つけるように、近くの崩れた煉瓦壁の横に「立入禁止、サッスーン」と書いた立札が何カ所か眼についた。

附近がこうした状況であったから、そのころ私は二階に寝ながら「さんのみやー、さんのみやー」という駅員の声をきいたり、ホームを歩く人影の向うに光る海を見ることができた。

このように盛り場にも近かったこともあって、夜八時ごろ、ときにはガラス戸を震わせる奇妙な音を、私は都会の騒音の一つだろう位に考えて気にもとめなかった。ところがもうここに住んで十年も経ったころ、なんとその音が船の汽笛のこだまだと教えられて、何とポエティカルだと驚いてしまっ

た。裏山に当った汽笛が、こだまになる――。港まち神戸が台所へ入り込んだ気持であった。

こうした神戸ならではの極めつけは大晦日である。テレビが紅白歌合戦の賑やかさから静かな雪の山寺に変わる。除夜の梵鐘がオンオンと次第に音色を細め、アナウンサーが行く年来る年を告げて時報が零時を告げた瞬間、中山手カトリック教会の鈴が高らかに響き渡る。ほとんど時を同じくして、



山本通りの回教寺院

港に碇泊した大小さまざまな船から一斉に汽笛の吹鳴が始まる。この国の習慣に従って祝意が表されるのである。

ベランダから沖を見ると、冷氣の中にイルミネーションを施した船も見え、赤毛の船長がにこやかに乾杯するさまが見えるようである。

と、表の通りで爆竹の弾ける音、これがひと通りすむと、やがてガヤガヤと話し声が通り抜ける。生田神社へ初詣で行く人たちである。うちは近いんだからと、娘の手をひいてこの人たちの後を追うと、中山手教会から出てきた外人から「ハッピーニューイヤー」と声をかけられる。

この情感は多くの人から語り伝えられて、東京、大阪から神戸へ来る人も多い。今年もまた大晦日のホテルでは、幾組かの夫婦が耳を澄すことであらう。

△その109▽

まっとうな建築設計競技の成果 稲沢市荻須記念美術館を 都市のコアに／

嶋田勝次

△神戸大学建築学科教授▽

大学の研究室のゼミの学生諸君とは、夏は卒業研究のチェックを兼ねて新しい建築の見学会を、そして冬には卒業前の追い出しコンパを兼ねてスキーツアーを実施して来たが、この夏は東海地方の最近の建築を訪ねることになった。

学部四年生と大学院一・二年の学生に我々を加えて三十人前後の人数となり、バスをチャーターした二泊三日の小旅行で、能率よくいくつもの最新の建築を見る事が出来た。これから時代の変貌を実感出来たが、その中でもたとえば資生堂アートハウス（谷口吉生設計）や、トヨタ鞍ヶ池記念館（横文彦設計）などから、現代の豊かで清らかな诗情にふれることが出来たのとはかく幸いだった。

それらの中で今回は名古屋市の西北に接する稲沢市の荻須記念美術館（昭和五十八年夏開館）を紹介したい。

荻須高德画伯は、この稲沢市の出身で、東京美術学校卒業後直ぐ、昭和のはじめフランスに留学され、大戦時の何年かの帰国の時はあったが、長いフランス生活は、画風にじみ出ている。

五十五年十月、画伯の名誉市民第一号になられたことを記念して

記念館の建設が企図され、その建物をアートサンクチュアリとすること共に、市の文化の中心として緑豊かな絵になるまちづくりを求めて、この建物についで、市



美術館絵景による外観全景

の保健センターが同じ設計者による同種の端正な建築が並ぶことになった。その基盤にはまっとうな建築設計競技の伝統が定着した結果といえる。

第一次コンペは五十六年十二月応募作品四四一点から五五点入選となり、第二次コンペが五十七年二月に行なわれ、五者の中から選ばれた当選者は竹中工務店の徳岡晶克氏であった。

竹中の徳岡氏の建築デザインに

は、当然これまでの多くの実績の積み上げがある。そこにはその場限りの場当りのけれん味とは異なり、一寸見にとびつくようなものは何もない。ただ大きな切妻屋根一棟あるだけの単純な平面計画だが、やはりそこには力強さがあふれているし、それぞれの詳細部分まで筋が通って明快である。

荻須画伯の作品は、ほとんど終始一貫してパリのうすよごれた壁面や広告塔や摩滅した石畳などの、生活のしみついた街の状況をえがいて来ているが、その中から、パリとフランスを愛しつづけた精神が、絵の中に凝縮している。

六十一年十月パリのアトリエで制作中に亡くなられて故郷に帰ることになった画業は、どうたどることが出来るようになるのか、明確になったとはいえない。

完成して間もない名古屋美術館（黒川紀章設計）にも画伯の作品がウターンされるのを聞く時、まず今秋の大々的遺作展を楽しむにせざるを得ないのではなからうか。しかし折角の故郷のみごとな美術館で、画伯をじっくり見つめ直す拠点にしてほしいと思うのである。

東海地方の新建築行脚は色々発見もあったが、もうひとつ先に紹介した内井昭蔵氏の、世田谷美術館につづく一宮市博物館の建築デザインに、豊潤さのこぼれ落ちる様子を見た。たとえば柳原義達先生の彫刻の鴉と鳩など、小さな坪庭にレリーフ的に数羽をおいでするなど、とにかくみごとなものである。

経済ポケット ジャーナル



★日本のアパレルシーンに
新・流通時代の誕生

ジャパンマーケットセン
ター（住友信託銀行・トラ
メル・クロウ・インターナシ
ヨナルの合弁会社）は世界
的ファッションビジネスの
拠点を狙う「神戸ファッ
ションマート」（六甲アイラ
ンド内）の建設計画を発表
した。64年



神戸ファッションマート完成図

1月に着工
66年3月に
オープン予
定。国内外
のアパレル
メーカーや
ホールセラ
ー・テナン

ト約500社が、常設展示
場を置く巨大マートビルと
なる。情報付加価値性の高
いファッションビジネスセ
ンターとして、バイヤーと
メーカーとの理想的な接触
の場となる他、ビジネスサ
ポート体制も備えている。

★時代を創る―神戸J.C.創
立30周年メモリアルフォー
ラム・インKOBEBE88―

「心はタイムマシーン・
今時代のキャッチアップを
―はじめよう21世紀へのウ
ォーミングアップ―」を基
本テーマに地域のコーデイ
ネーターとして活動が続け
ている神戸青年会議所が、
創立30周年記念フォーラム
を開催する。（9月1日（木）
神戸国際会議場）

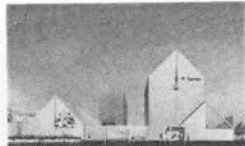


トフラ―氏
ひろげる。

「時代を創る―多極化時代
における協調と発展―」を
メインテーマに記念対談と
第一―第八までの分科会が
開かれ関西・神戸の今後を
予測する明確な指針が打ち
出される。記念対談では
「未来の衝撃」〔第三の波〕
などの著者で世界的に有名
なアルビン・トフラ―氏が
出席、ダイエー会長中内功

★カワノ、ポートアイラン
ドに新ビル

神戸の代表的なシューズ
メーカー、カワノは、現在
ポートアイランドのファッ
ションタウン内に新ビルを
建設中。十二月に完成を予
定している。同ビルは鉄骨
コンクリート四階建て、二
階建ての二棟から成り、外



新社屋完成図

観はスベ
イン風の
建物とな
る予定。
新ビル
の一階に
キスコ、
キッカー

ズといった輸入品中心のモ
デルショップを設置し、情
報発進基地を目指す。二階
以上は企画、デザイン部門
が移転し、別棟は配送セン
ター、倉庫として使用する。

★KOBEOフィスレディ★



清楚な感じが印象的。各種パンフレッ
トの広報、イベント企画のプロデュース、
レストランのメニュー作りなど幅広い内
容の仕事をしている。現在同ホテル
のオープン（9・29）に備えて大忙し。
1日1日の過ぎていくのがとても速い
とか。マイペースでまわりの影響をあまり
うけない性格で、見かけよりは頑固な面
もあるそうだ。休日は水泳や洋裁などで
有意義に過ごしている。

尼崎市在住 おとめ座のO型。

小島あや代さん（25）
〈新神戸オリエンタルホテル
営業企画室勤務〉



高山正雄氏
高山物産
777 0
777 0
777 0

観光客でにぎわう北野町
そして三宮周辺。土地の有
効利用と駐車スペースの確
保が地元自治体にとっても
急務となっているだけに、
その完成はうれしい限り。

★220台収容タワーパー
キング！

㈱高山物産（高山正雄社
長）は中央区加納町3丁目
に西日本一のノックポ駐車場
高山パーキング（仮称・12
月1日オープン予定）を建
設中。ターニングブル内蔵
型立体駐車場のため、収容
後に車の方向を自動的に変
えてくれる。そのため入庫、
出庫時のわずらわしさが一
切ないのが特長。（最先端
パーキングシステム）

■連載エッセイ(一)

西日行

須磨浦所思

永田 耕衣

〈俳人〉



さいまよう

西行の遍世迷悟の歌々は、現代精神にも、或る次元の寂しい豊かな痛恨の音楽を、普遍的に持続している栄光ではなからうか。私は重ねて、道元禅師の《ただまさにやはらかなる容颜をもて、一切にむかふべし。》〔正法眼蔵四摂法〕という《柔軟心》を思う。それは《落日》の豪華な寂しさに似ている。

近来知遇を受けた俳人、和田魚里翁は戯作に秀れていたが、《朝寝人西行をにしゆきと呼ばんとす》一句を遺した。―傍点筆者―しかし、本文の題は《西日行》と読んで貰わねばならぬ。昭和九年初版の高浜虚子編『新歳時記』には未登録だが、昭和四十六年初版の山本健吉編『最新俳句歳時記』夏の部に、《西日》という新季題が登場している。

○西日*夏の西日は暑苦しく、ことに西向きの部屋にさしこむ西日は堪えがたい。西日を除けるため、窓や店頭には、簾やカーテンを吊し、日除をかける。近来、夏の季語として用いている。

カーテンの綾美しき西日かな 虚子
西日中電車のどこかつかみをり 波郷

といった例句も添えての解説である。本来、厄介な印象から《西日》は夏季独特の待遇にさらされているのだが、私が近時、須磨浦海岸で直面した《西日》は、厄介どころか、マサに仏教的な正真正銘の《落日》であった。

今年の暮春も初夏めいた某日のことだった。たまたま夕刻近く須磨海岸に出た。途端に、一抹の雲片もない西空に、淡路島山にかけて、まるで《古鏡》のような真んまるい《西日》に対面できたのであった。直視していて眼が痛くなるような鋭い光は漸く失せていたから、私はこの《西日》の《落日然》たる容貌に、佇立対面を久しくした。といっても、ジツとこの出会いを千載一遇の椿事として、大切に大事に眺め入って居ると、《西日》は島山に接近するにつれて、西没速度を早めて行く《無常》ぶりだ。刻一刻、それは常時昼夜を問わぬ《時》の刻みでありながら、格別な迅さに感じられ、惜しむに惜しみ切れぬ《莊嚴》の極み、その韻律が音楽的絶景だと思われた。一刻一瞬もソコに定着した同一音は無い音楽の空間的美観、これは《無常》が《無常》自身を《莊嚴》する《絶景》としか言いようのない《寂寥》の極致

である、と身に染みこむのであった。思い出した一句がある。

夕焼けて西の十万億土透く 山口誓子

昭和21年9月28日の作。十万億土というのは、宗教用語で、中村元著『佛教語大辞典』では、

の觀念が現代のどこかにも生きつづけているのであろう。事実、西方落日の完全な姿形をした燦然たる《西日》に無言佇立して数刻を対面してみれば、迷信や幻想意識は吹っこんでしまつて、只《呪文》それ自身のような自己《人体》の《實在》意識が、不可思議にも活機を呈するのだ。

放せ俺は昔の西日だとい
うて沈む 耕衣



この一句はソウした《西日》を巨大《人物》に見立てて、その落日の迅さを惜しむの余り、《西日翁》の襟首掴んで《まア待って呉れい!!》と叫んだ《凡夫我》にニコリした《西日》の応答を、想像で表現した会心の一句だ。《俺は昔から天行健なるまに、宇宙の法則任せて宇宙を回転優遊しているだけだよ。

人間様の妙な執着などを相手にしては居れぬワイ。》といったぐあいだ、私自身が我がままなエゴ人間の代表者面で、だからアキラメルことだ、と諧謔の《茶化し》を一番代弁で演じてみただけなのだが。

《カットも筆者》

《①娑婆世界と西方の極楽世界との間にある仏土の数。②西方十万億土にあるという極楽。》ということ。真言密教で《秘密安心》といわれている境地と重なる《極楽世界》のことらしいが、何しろ煩惱づくめの娑婆人間の幻想にすぎないからアイマイである。しかし、其処にこそ《救済普遍》

随想

旅のかたち

〈12〉

遠い灯

安水稔和

絵／中西勝

ひとときわ黒ずんだ沖から寄せてきて、遠浅の瀬にかかる、にわかには立ちあがり速さを増して寄せてくる。だいたい向うでどっと崩れて泡立ち、そのままその勢いで浜のずっと上のほうまで乗りあげてくる。

そんな光景を宿の部屋からガラス戸越しに見ていた。すぐ前が道路。道路のすぐ下が浜。そのむこうの荒れる海。人の気配のまったくない夏の海。ガラス戸に雨がぶつかって流れ落ちて、外景がゆがみ崩れ、またあらわれる。

これでは泳げないな。ざらざらした畳にまた寝転んで、読みさしの本を拡げる。宇江敏勝『炭焼日記』。出入りの本屋さんに頼んでいたのになかなか持ってきてもらえず、前日、町の本屋で見つけて買った。出がけに鞆に入れてきた。今度にかぎらず、出かけるときは手もとの一冊鞆にしのはせるのが習慣になっている。読めずに持ち帰るときもあるが、車中とか待合室とか宿の寝床とかで、まあしっかり読んでしまう。行先にかかわるものではなく、かかわるときもあるが、旅のなかにもうひとつ小さな旅、劇中劇を仕込む気分である。

このたびは、雨が降っていて風が吹いていて海

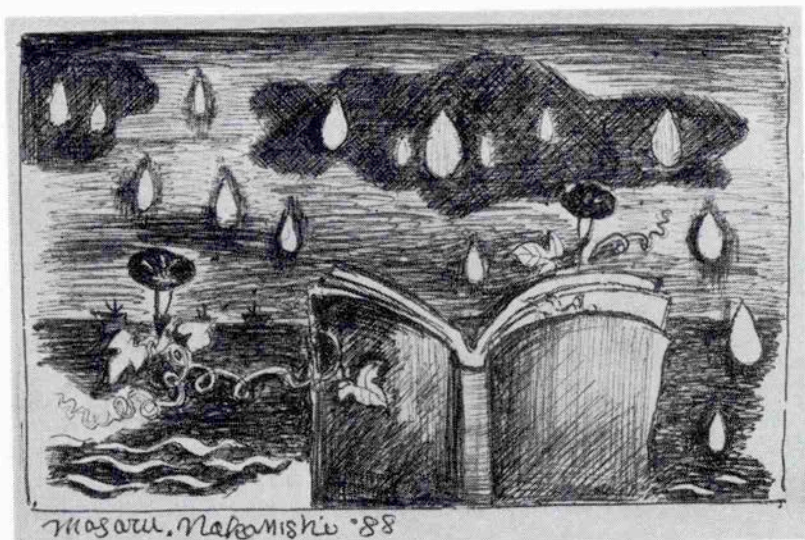
が荒れていて宿にこもるしかなく、本読みは意外にはかどって、あとすこしで読みおわる。山住みの人の山住みの子細を語った本を、海辺に来て海の音ききながら読んでいたわけ。今読んでいるのは、著者が六年間住んで働いた造林小屋での記録の最後のあたり、十一月九日の項。すこし抜き書きすると。

明けがたから雨が降りはじめて、ほかの連中が休むのに、「私一人だけ弁当をこしらえてもらって、文庫本の『ロシア近代詩集』とともに背負袋に入れて出かける」。霧の流れる急斜面の草はらで、「合羽を着て、つばの広い経木帽をかぶって刈る」。

雨が激しくなると、昼時。「焚火をしようとして枯枝を折り、『ロシア近代詩集』を破いてライターで火をつけてみたが、湿っていて燃えない。おかずはコンニャクの和えものと野菜煮付とタクアン。雨はおかず入れに溜まるほどに降る。お茶を入れたコップの中でもびちゃびちゃとはねている。せめて飯には入らぬようにと、飯盒に帽子をかぶせるようにして食う。その飯がまた空腹にたまらないほど美味しいのである」。

こんな文章をゆっくりと口のなかで噛むように読む。ゆっくりと読み進む。

ぐっしょり水を吸った詩集を読むのをあきらめた著者は、急いで鎌を研ぎ、作業にかかる。「もはや合羽の内までもずぶ濡れだが、それでも働いているかぎり身体はあたたかく、汗さえもにじん



でくる」……。

夜になって、雨は一時やんだが、あいかわらずの風と波だ。雲が走る。暗闇のはずなのに、岬や裏山の輪廓がみえる。暗い海のはてのあのあたり、海と空との分れ目がわかる。その沖に、灯があらわれた。二つ、三つ、ぼつんぼつんと離れて。イカ釣り船の灯である。沖はかなり荒れているはずなのに。心なしか揺れ動いている。いつもなら沖一面に並ぶだろうに、心細い出かただ。夏とはいえ肌寒い。星も夜光虫も光らない。闇の奥に灯がぼつんぼつん。折角だから、しばらくつきあおうか。石垣のうえに腰をおろして、遠くの灯と向きあう。

対馬で見たイカ釣り船の大量はすごかったなあ。夜の岬から見た海は巨大な生きもののよう的一面に燃えていた。対馬でも壹岐でも、イカくった。瀬戸内でも島ごとに、イカくった。大間のイカ井はすごかった。ドンブリに山盛りのイカの細切り。さっき食った当地の夕食にもイカが出ていたっけ。

風に乗って雨がやってきた。沖の灯がまたたいている。消えそう。消えたか。大粒の雨に追いつてられて、宿に帰って横になる。絶え間なく響く、耳から離れないこの音は。海の鳴る音か。それとも、宿におおいかぶさって崩れんばかりの裏の山の鳴る音か。遠い灯、まぶたのうちにまたたいて。遠いものにどうして見入るのだろうか、なつかしいものをみつめるように、しげしげと。遠いもの離れたものにこそ、おのれの姿が見えるともいえるのか、とおもうまもなく眠ってしまった。

音

楽夜話〈35〉

神戸っ子アーチスト

バンクーバーへ

宮本 慶子

〈神戸マリンバソサエティ主宰者〉



「又々、義武流でやらされたな。」というのが一同の感想です。吉田義武氏（神戸市民文化振興財団）から「アメリカへ行ってくれへん？」と誘いがあったのが昨年8月。ギターの山崎繁氏、ピアノの尾上享子さん、歌の反橋恵子さんの名前が上がり、お互い顔を合わせる毎に、「アメリカの何処へ行くの？」「シアトルやいってたよ。」

「うそー、バンクーバーやって聞いたよ。」「バンクーバーやったらカナダやん。」「私はワシントンやって聞いたけど」そう言い続けて出発4日前某新聞に「神戸のアーチスト、バンクレイ市で公演」と、大きく載りました。もうその記事を読んでも誰も動ぜず、「まあ、この顔ぶれで行くんやから、バンクーバーかバンクレイか知らんけど、どっかで演奏会はあるんやろ、これが義武さんのやり方や。」と、諦めの境地で7月13日、アメリカに向って出発したのでした。

ワシントン州バンクーバー市、芸術海外交流会国際ソロプロロチミスト協会の主催で、日本文化祭（2回目）なるものがコロムビア・アート・センタ

ーで16日より30日まで行われ、コンサートその他、染色の展示、生け花、茶道、おり紙、着物ショー等、市長夫妻を迎えて多彩に繰り広げられました。吉田さんの思い入れがあったのでしよう、神戸組は全員をプロで固め、曲目も、中村茂隆、下村正彦、大前哲氏の神戸の作曲家の作品を盛り込み、演奏会の内容としては、大変意欲的なものになりました。私達はこの行事について何の知識もなく参加したものですから、却って実に淡々と日頃の演奏をやる事が出来ました。交流を目的としてこられた主催者側に、神戸っ子の余りのレベルの高さに大変な戸惑いが見受けられましたが、日を重ねるにつれ、それはいくつかの感動となって表われてきました。ギターの山崎さんの演奏を聴いてバンクーバー交響楽団のファゴット奏者（女性）からは是非共演をしたいとの申し入れがあり、急きょプログラムに「18世紀のファゴットとギターの為のソナタ」を組み入れる事になりました。楽屋での打ち合せに緊張感が漂い、煽り役の斎藤信夫氏（神戸フィルマネージャー）もいつになく静かに



右/コンサートを終えて。後左から、吉田義武、筆者、斎藤信夫、山崎繁、前左から、尾上享子、反橋恵子、榎本美紀子の各氏 左/スカイアートパレードにて。

見守っていましたが、息の合った演奏に客席も舞台横も拍手喝采、これこそ真の芸術交流と感激致しました。マリンバの発祥地アメリカでの演奏会は、いろいろな意味で他国での経験と違ったものになりました。まずマリンバをあちらで用意してもらえた事、ホームステイのお宅に40年前のアンティークなマリンバがあり、連日連夜、その奥さんと合奏をして「ハッピー/ナイスデイ」と遊べた事です。若手の榎本美紀子さんのデュオ、尾上享子さんにピアノをお願いしコンチェルト等も演奏しましたが、現代音楽及びソロ楽器としての認識がまだ日本ほど高くなく、私達のテクニクにびっくりという状態でした。最終の日トリ、出番直前に「ワァーとやろうか。」という雰囲気になり尾上さんとぶっつけでアメリカンパトロールをアンコールにやりました。ヤンキードゥドルの処に来ると聴衆が拍手と「ブラボー」の歓声で総立ちになり、自分の音が聴こえなくなりました。「これや、これがアメリカや」と、こちらも胸が熱くなり、「義武さん、乗せられて来たけど、来て良かったわ。」と呟いていました。

広場では、田中徳喜、吉田義武、山本和子、斎藤信夫氏で風船を上げました。一万個の風船をアメリカの人達に膨ませてもらいドラゴンの型にして練り歩き、空に放つという趣向で、大人も子供も喜々として働きました。美しく天に向って上る風船を拍手と歓声で見送る心は一つ。私は9日間の滞在でアメリカの懐の深さ、余裕に圧倒され、我々の神戸っ子のさらりとやっていた親善交流の成果に感激していました。神戸っ子万才！

夫婦とは

まず良き友達である。

ジャン・メルオー神父 〈尼崎カトリック教会主任司祭
英知大学教授〉

多田智満子 〈詩人〉



ジャン・メルオー神父

古今東西、結婚は人生の大関心事、あまたの芸術家が恋をし、愛を語り、すぐれた文学が生まれ、甘美なメロディが流れた。結婚が人生の華であるのか、それとも墓場であるのか。そこには様々なドラマがある。喜劇、悲劇、喜劇のような悲劇、悲劇のような喜劇。

今回は詩人の多田智満子さんをお願いして、ジャン・メルオー神父から、結婚にまつわるいろいろな話を伺っていただいた。博識、博学なお二人ゆえ、話はアダムとイブから現代若者論にまで及び、結

婚を中心とする男女関係小宇宙の様相を呈した。

現在は結婚式をまじめにとらえる時代

メルオー 結婚式に対する考え方は、時代により変化していきますね。どういうことかといいますと、非常に厳粛に儀式ののっとって行われたり、愛し合っているなら、形式的、儀式的なことはあまり重視されなかったり、というように周期性があります。現在はいいますと、みなさんかなり厳粛にとらえていらっしゃるようです。アメリカでも最近、同様の傾向があるようです。式前の当人達に対する牧師の話でも、あまり楽観的な話は好まれません。かえって、少しきびしいことをお話しの方が喜ばれます。

多田 キリスト教では、イエス様の時から一夫一婦制なんです。旧約聖書のアブラハムとかヤコブの時代に遡りますと一夫多妻になりますね。

メルオー はい、聖書がまとめられる前の話ですね。狩猟時代には男性が遠方まで猟に出まして、不在がちにな

りますから、家庭は女性中心でしたが、農作の時代になり、男性が家庭にいるようになりましたので、地位もあがり強くなったのです。

多田 女性が一番弱い立場だったのは、遊牧の時代ですね。族長が正妻の他に何人も妻を持っていました。

メルオー 聖書の最初にある創世紀には、人間の理想とされる姿が書かれています。その中には一夫一婦制も含まれているのですが、理想というものは、すぐに達成できるものではありません。

多田 そうなんです。一夫一婦制というのも、2千年、3千年という長い年月をかけて、確立されてきたわけですから。

メルオー 人間はいつも理想を達成するために、努力を続けていきます。

多田 男女の生まれる比率がほぼ同じでしたら、イスラム教のように一夫多妻制の場合、女性の数が足りなくなるのではないのでしょうか。私など他人事ながら心配になるのです(笑)。

メルオー それは大問題ですね(笑)。私は専門家ではないですからわかりませんが。ただ妻が一人ですと、逆に経済力を疑われますから大変です。

多田 一種のステイタスシンボルですね。イスラム圏では女性の地位が低いので、一人で生きていくことは難しいです。経済力がありませんので、男性に頼らざるをえないという現実の問題があります。ですから一夫多妻制といいますが、そのあたりに原因があると思います。女性



多田智満子さん

に経済力がないということは、よくありませんね。非常にみじめな状態になる可能性が高いです。

メルオー キリスト教の結婚式の良さは、どこにあるかといえますと、言葉によって、当人の意思をはっきりとさせることだと思います。お互いに言葉で結ばれますから。私が式を司る時には、ご本人達に誓いの言葉を、最初から最後まで唱えてもらいます。そうしますと御本人達も満足されますし、出席された方、特に年配の方はとてもほほえましく、また同時にうらやましく思われるようです。

多田 確かに、言葉ではっきりいうということは、キリスト教結婚式の特徴ですね。日本では黙って三三九度の杯を交わして、それで夫婦ということですから。

結婚して子どもをつくるということ

メルオー 動物と違い人間は、あくまで人間らしい出会いを求めているわけです。結婚というのはまず第一に、愛の交わりであり、そして互いの人格を認め尊重し合うことだと思います。ですからそういった意味では、福祉関係に携わっている方で、独身を通している方もいらっしゃると思いますが、こうした奉仕の精神を通じた人間関係というのも、結婚と同じような意味合いがありますね。

カトリック教会の昔の教えでは、子どもをつくることを前提とした結婚観というものがありませんが、現在ではそれも変わっています。結婚の目的は2人の人生を形成していくことで、子どものことには言及していないわけなんです。

多田 昔は子どもができませんと、女の人はいろいろと大変だったのです。

メルオー ええそうでしたね。しかし、子どもというのは神様からの授かりものですから。

多田 日本でも昔はそう考えられていたのですが、医学が発達しまして、男女を生み分けられるようにまでなりましたが、ちょっとそれは行き過ぎていくようにも思

います。ある程度は自然にまかした方がいいと思うのです。

メルオー はい、その通りですね。

多田 私の友達には、芸術家の方とかが多いのですが、子どものない人も多いですよ。わざとつくらない。各自の自由ですから。

メルオー ー、ちょっと問題ありますけどね。

多田 やはりカトリックでは産児制限は認めてもらえないのですか。

メルオー 必ずしもそうではありません。しかし、中絶はいけませんね。

多田 そうすると予防的なことなら……。

メルオー はい、最近子どもの教育は大変です。経済的なことなどを考えます。ですから子どもさんというよりは、2人ぐらゐをりっぱな人間に育てることが、現在では非常に大切なことだと思います。

多田 かつては日本でも、産めよふやせよといって、子どもが多い方がよいという風潮でしたが、昨今のようにどこへ行っても人があふれている状況で、これ以上ふえますともうどうにもならないと思います。ですからある程度の制限はやむをえないと思います。

メルオー そこで一つ気をつけなければいけないのは、今の文化の状況で判断することの危険さです。20年後、30年後のこととも考慮しないといけないですね。

多田 子どもが少なく老人ばかり、というのも国として困るということですね。

メルオー そうです。そういうことを考えますと、現在はちょっと産児制限が進みすぎているようにですね。

多田 確かに一部そうなんです。地球全体として考えますと、明らかに人間は多すぎますね。

メルオー 何かアンバランスなことが生じますと、自然はそれを修復する方向に進みますね。私は非常にうまく自然というものは機能していると思います。

多田 かつてノアの洪水が起こったり、ペストが流行し

たり、また愚かな戦争を繰り返したりと、人口が減少する要因がいろいろあったわけですが、現在は幸いにもそういうことがなくなりましたので、まあ戦争は別ですが、人口は増加するばかりですね。



聖書の話から哲学の話まで、話題は広がる

メルオー 男女が産まれる比率というのも、ほとんど同じですね。これも自然の巧みさのなせるわざです。もっとも最近では若干男性の方が多くて、男性にはきびしい時代になってきましたが（笑）。最近の若い人は、本当に子どもが欲しくないようなのですが、これなども人間とというのは自然の一部ですから、人口増加に対する自然の抑止力が働いているのだと思います。自分達の未来にかかわることですから。

多田 悲観的、厭世的になっているという事はないでしょう。地球の汚染がどんどん進んでいますので、将来のことを考えると、子どもをつくる気になれないというような。

メルオー 若い人は、そこまで考えていないのではないですか。年をとられている方は、若い人達にどういう未来を残したらいいか、ということを考えますが、若い人はまだまだ自己中心的に考えがちですから。

メルオー 全然別の話なんです、一度離婚したカップルが、またやりをもどすことがありますね。私の知っているだけでもわりとあります。

多田 飽きがきたからですか、いろいろな理由で別れても、他にいい人が見つかるとは限りませんからね。それと男の人の中に、何回も相手を変えるのですが、おかしなことにそれがみんな同じタイプ、といった場合があります。

メルオー それは自分の母親と同じタイプを求めているのではないですか。

多田 そうなのでしょうね。本人はまったく意識してはいないのですが、端から見ると同じような人ばかり選んで：（笑）。

メルオー 本人は無意識なんですけど。

多田 男と女というのは、いろいろと相異点があるから結婚するわけですが、プラトンがいうところのアンドロギュノスというのは、両性具有なわけです。頭が2つあれば、手足も4本別々にあるという。そういう完全な存

在であつたわけですが、天に昇ろうとして神の怒りにふれ、2つの存在に、男と女に引き裂かれてしまった。そしてそれ以来、半身がお互いに求め合っているという神話があります。

メルオー それは創世紀にある、アダムからイブが生まれた話と少し似ていますね。

多田 あれは女性には不愉快な話です。アダムのあばら骨一本からイブが生まれたわけですから（笑）。

メルオー ところで国際結婚は、これからますます盛んになるのではないですか。大変良いことだと思います。

多田 私もそう思います。今回の結婚特集の中に、国際結婚のカップルを紹介するページがあり、その中に生田神社で式を挙げられた、リビア人男性とイギリス人女性の夫婦が載るそうですが、これなど現在イギリスとリビア間に国交がないことを考えますと、愛の強さ、平和の尊さが感じられて、大変素晴らしいことだと思います。ですから国際結婚は、世界平和のためにも良いのではないですか（笑）。私の友人にも国際結婚をされた方は、かなりいますよ。

メルオー 国際結婚のカップルは、どちらの国で暮らすかによって、だいぶ状況が変わると思います。日本人が向こうで暮らすと案外うまくいくようです。

多田 日本人が向こうから相手を迎えて来るよりも、いいわけですか。

メルオー 日本人は連れて来た妻なり夫なりにも、日本の習慣通りに生活することを期待しますから。外国人にはちよつとつらいところがありますね。

若い人に教会で式をあげる風潮があるが：

多田 最近、日本人に教会で式をあげることを望む人が多いのは、何かそのムードだけに、あこがれているようなところがあるようなんですが。何も信仰など持っていないのに、教会で式をあげる方がカッコイイ、というような風潮があつて。そういうこともあつて、最近建つた

ホテルにはチャペルがありますね。

メルオー 若い人はまだまだ無邪気なところがありますので、確かにきっかけは、単にそのムードにあこがれただけのようにも見うけられます。しかし、何回かお会いして、結婚のこと、神のこと、などをお話していると、精神的にだんだんと変わってこられます。私どもはそういったことを、何度も体験して知っていますので、喜んで結婚式をお引受けしているのです。

多田 そういうことであれば、深い信仰を求めるのは無理だとしても、キリスト教を理解することはできません。

メルオー そうです。最初は結婚というもののさえ、理解されていない方もいらつしやいますが、私どもが指導していくといいますが、事前にいろいろとお話しますと、式の当日は本当に立派で、内容も大変よく理解されています。誓いの言葉を聞けばわかります。それを自信を持って真摯に唱えられます。

多田 神式ではそういった指導のようなことはなさいませんね。結婚する2人に指導者がいて、ちゃんと心がまをさせるといふことは、とてもいいことだと思います。

メルオー 私たち大人は「近ごろの若いものは：」とよく非難めかしていますが、やはり私どもより純粹で、とてもひたむきなところがあります。中には社会で不正を働く人もいますが、まだそれは心が弱いからです。だんだんと心も強くなっていきます。

多田 少しお若いところはありませんか。

メルオー そうですね、多少精神的に深みが足りないところはあります。哲学的な考え方とかには弱いところがあるようです。

多田 むかしの学生はよく本を読んでいた。もちろん哲学の本も読んでいましたし、読んでいなくても、読んだような顔をしていました。しかし最近の学生は、難しい本をまったく読まないですね。

メルオー 私は大学で倫理学も教えています。その時にはなるべく平易な例を出し、哲学的な物の見方、思考法を教えています。そういう場を設ければ、若い人も一生懸命に考えます。ですから問題は普段の環境といえますか、まったく物を考えさせようとしな。現在の社会状況にあるのではないですか。

多田 はい、ことにこのごろは、とても目まぐるしい時代です。一つの事を深く、突き詰めて考えることができない状況です。

メルオー そうなんです。物の存在理由を考える、ということがありません。色や形など皮相的なことには、大変に詳しいのですが。

多田 ええ、そういうことの理解はとても早いのですが、なぜこうなる、といった考えが抜けています。

メルオー とても大事なことをおっしゃいました。“なぜ”ということ。若い人はそこまで考えが及びません。“なぜ”ということは、物の本質を探し求めることです。先ほど申しました存在理由ですね。

多田 社会の動きに氣をとられて、それを追いかけるのにそがしいのでしょうか。頭の回転は大変に早いのですけれども。

メルオー 実用的なんですね。

結婚とは、夫婦とは、

メルオー 私も日本に来てだいぶたちましたが、フランスの夫婦と日本の夫婦を比べますと、文化の違いが大きいですから、一概にはいえないところもありますが、フランスの夫婦の方が平等という意識が、徹底していると思います。イエス様は、たとえ相手が罪人であっても女性に対しては“婦人よ……”と、いつも尊敬をもって接していましたから、教会の方でもそのイエス様の考えを、ずっと受けついできているわけなのです。

多田 いわゆる騎士道ですね。

メルオー そうなんです。こういう言葉があります。

“神は立っている、母性は座っている、男はひざまずいている”

多田 ——（笑）。

メルオー 冗談のように聞こえますが、レディファーストの思想もこういうところから生まれているわけです。

多田 確かにそうですね。

メルオー 前に申しあげたようにかつては結婚も、子どもをつくるためだったのですが、今では、お互いが人間的に補い合っていくという意味合いがあります。人間の成長、形成に寄与していくわけです。

多田 形成といえますと難しいのですが、もっと単純に、一人で行くことは寂しいから結婚する、ということもありますね。パスカルに「人は一人で死ぬ」という言葉がありますが、人が一人で生きていくのは、よほど強い人間でないと、寂しくて耐えていくことが難しいですよ。

メルオー 結局は友人を探し求めているのです。ですから真の友人がいれば、あえて結婚しなくても良いといえます。人間らしく円満な生活を営むには、どうしても相手が必要。そして大事なことは、夫婦・というはま・ず友人である、ということなのです。

多田 そうですね。よい夫婦というのは、まずよい友達なのですね。

△一九八八・八・九ピストロ・ドウ・リヨンにて▽
（文責・編集部）